

旧ソ連朝鮮人研究の現状

——李愛俐娥著『中央アジア少数民族社会の変貌——カザフスタンの朝鮮人を中心に——』
(昭和堂 2002年) を読んで——

はん や し ろう
半 谷 史 郎
おか な つ こ
岡 奈 津 子

- はじめに
- I 本書の構成・内容
- II 朝鮮人の歴史研究——ロシアおよびカザフスタンの研究動向を中心に——
- III 本書の貢献と問題点
おわりに

はじめに

旧ソ連の中央アジア諸国に多数の朝鮮人^(註1)が暮らしているという事実は、日本人にとって身近な民族である朝鮮人がなぜ遠く離れた異郷の地にいるのかという至極当然な疑問と結びついて、日本人の好奇心を刺激してきた。彼らの存在はソ連崩壊以降、マスメディアで取り上げられることも多く、また専門的な研究テーマとして研究者も関心を寄せてきた。ソ連時代の民族強制移住と独立後のカザフスタンにおける民族問題に関心を抱く評者にとっても、朝鮮人は重要な研究対象のひとつになっている。

旧ソ連地域への朝鮮人の登場は1860年代までさかのぼる。当初は小規模だった移動は、1910年の日韓併合の前後から、日本の植民地支配を逃れるための政治的理由も加わって規模を次第に拡大する。1917年のロシア革命、1922年の極東^(註2)でのソビエト政権樹立を経た後、1926年に行われた国勢調査の記録では、極東地方の朝鮮人は16万8000人を数えた。彼らの大多数は貧農や漁民だったが、1920～30年代を通じてソビエト国籍の取得が進み、コルホーズ（集団農場）に組織されていった。1930年代に入って以降、日ソ関係が緊張の度合いを高める中で、ソ連当局は日本のスパイとなりかねない朝鮮人への猜疑心

から、1937年に強制移住を断行する。8月から9月にかけて、共産党と政府の2度の合同決定によって計17万2000人の朝鮮人が中央アジアへ追放された（カザフスタンへ9万5000人、ウズベキスタンへ7万7000人）。強制移住後、朝鮮人は居住地を移住先に限定される。1953年にこの制限は撤廃されたが、極東帰還の動きはほとんどおきなかった。1980年代末にペレストロイカの改革の機運が高まると、ようやく強制移住の誤りが公式に認められた。この結果、一部では極東帰還運動を組織する動きもおきたが、大きな流れを生むには至らなかった。

なお現在の中央アジア諸共和国には、旧ソ連地域の朝鮮人の約7割がすんでいる。彼らは基本的に1937年に極東から強制移住させられた人々の系譜に属するが、このほかに、日本支配下の朝鮮半島から樺太へ強制連行された「サハリン朝鮮人」が中央アジアに移住した例や、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）からの亡命者も若干存在する。

この中央アジアの朝鮮人について、日本で初めての学術書が2002年に出版された。韓国生まれの著者・李愛俐娥^{イリョ}は、立命館大学で修士課程を修了した後、京都大学大学院人間・環境学研究科で博士号を取得している。本書は、その博士論文〔李 2000〕を加筆・修正して出版したもので、2003年には第19回大平正芳記念賞を受賞した。この作品を紹介・批評することが本書評の第1の目的だが、評者はこの機会を利用して、朝鮮人に関する歴史研究の到達点を明らかにしたいと考えている。このためまず朝鮮人研究の現状を紹介し、そうした先行研究と比較する形で本書の批評を展開していきたい。

I 本書の構成・内容

本書の構成は次のようになっている。

序章

- 第1章：沿海州朝鮮人社会の形成と推移
 - 第2章：沿海州朝鮮人の強制移住
 - 第3章：強制移住後のカザフスタン朝鮮人社会
 - 第4章：ソ連体制の変化とカザフスタン朝鮮人社会
 - 第5章：カザフスタン朝鮮人社会の変化
 - 第6章：カザフスタン朝鮮人の意識変化
- 終章

第1章は、ロシア極東における朝鮮人社会について、朝鮮半島北部からの移住が始まった1860年代から、強制移住を迎える1937年までを論じている。帝政ロシア時代を扱った第1節では、朝鮮人移民の増加、移民に対する政策、農民・労働者の生活を取り上げている。第2節は、ロシア革命期に誕生した朝鮮人自治組織、および朝鮮人による社会主義運動の変遷を概観する。第3節はソビエト政権成立後の時期を対象とし、土地・国籍問題、極東北部への朝鮮人移住政策、農業集団化、さらに朝鮮人自治領域創設要求について述べている。

第2章のテーマは強制移住である。著者はまず、朝鮮人強制移住の背景として、スターリン時代の民族政策と諸民族の強制移住、および日ソ関係の緊張について手短に触れたのち、強制移住の実態を詳しく論じている。章末では、この強制移住に対する日本の反応も取り上げられている。

第3章以降は、地域的な対象を主にカザフスタンに移している。第3章で著者は、強制移住前の時期について、小規模ながらもすでにカザフスタンに居住していた朝鮮人に触れつつ、当時のカザフスタン社会の状況を概観する。次に、強制移住によってカザフスタンに連れてこられた朝鮮人たちが直面した困難、カザフスタン国内やウズベキスタンへの再移住などを具体的に描写し、さらに強制移住先での居住

地制限などにも言及している。

第4章および第5章は、朝鮮人独特の出稼ぎ請負農業である「ゴボンジル」を中心に扱っている^(注3)。第4章では、カザフスタンの朝鮮人の都市化と人口の推移に続いて、ゴボンジルの特性およびその歴史的背景、具体的な営農方法や居住形態が紹介されている。第5章は、ソ連崩壊後の朝鮮人社会を、移住(国内・国外)、農業部門の私有化に伴う集団農場から生産協同組合、個人農およびゴボンジルへの移行、さらにゴボンジルそのものの変化という観点から論じている。なお、第4・5章では民族アイデンティティの問題も若干取り上げられている。

第6章は、1990年代後半にカザフスタンの朝鮮人に対して実施された2回のアンケート調査の結果を紹介している。これらの調査は、カザフスタン最大の都市アルマトゥ市、およびアルマトゥ州中部に位置するウシュトベ市の住民を対象として行われた(サンプル数は、1996年が335人、1999年は247人)。質問項目は、言語、教育、伝統行事、宗教、結婚、民族間関係、国家への帰属意識、移住希望の有無など、多岐にわたっている。

終章は、カザフスタンの朝鮮人が現在直面する問題、なかでもその農村部における変化とそれに対する朝鮮人の戦略を概観したうえで、著者の今後の研究課題を提示している。

このように本書は、朝鮮人のロシア極東への移住が始まる19世紀後半を起点とし、強制移住、およびその直後の中央アジアでの定着過程を扱った前半部分(第1章～第3章)と、強制移住以降、現在に至るまでのカザフスタンの朝鮮人社会に焦点をあてた後半部分(第4章～第6章)で構成されている。また前半では歴史学的アプローチが、後半ではフィールド調査を主体とする社会学的アプローチが援用されており、叙述の方向性が異なっている。そこで本書評もこうした区分を踏襲し、前半と後半を個別に論じたい。なお、先行研究については、以下で論じるように、歴史研究の分野では1990年代以降大きな前進が見られたが、本書後半部分の主要テーマであるゴボンジルに関する研究は、著者が強調するように、まだ始まったばかりである。そのため、本書評

では第Ⅱ節で、朝鮮人の歴史研究について最近の研究動向を整理したのち、第Ⅲ節で本書の貢献と問題点を論じることとする。

ちなみに、技術的な問題だが、本書にはロシア語固有名詞の見慣れない日本語表記が頻出する。原語を朝鮮語読みした発音に引きずられた結果、読者が元の固有名詞を想像できないほどかけ離れた表記になっている場合もある。誰もが納得する完璧な翻字法はないが、いちおう大まかな合意はあるので、研究者はそれをある程度尊重すべきだろう。なお、同じ固有名詞に異なる表記を当てた例や、慣用と異なる専門用語の日本語訳も散見された。このほか、章末の註、参考文献(235~239ページ)および最終ページの著者業績の表記方法が学術的なルールに則っていないこと、註に示されたアーカイブの名称が1カ所(114ページ註43)を除いてすべて略称でしか示されていないことも、不備として指摘しておく。

Ⅱ 朝鮮人の歴史研究——ロシアおよびカザフスタンの研究動向を中心に——

ソ連の朝鮮人に関する歴史研究で、研究者の最も大きな注目を集めたテーマは、間違いなく1937年の強制移住だろう。1990年代以降、かつての政治的タブーが取り払われ、急速に研究が進んだ。朝鮮人強制移住の研究史としては、和田(2003)の紹介が簡にして要を得ている。なお執筆時期および視点の違いのために和田は取り上げていないが、強制移住に長年取り組んでいるブガイの包括的な作品[Бугай 1998]、カザフスタンでの移住後の歴史を扱った Кан(1995)も、この分野の代表的研究である。

強制移住に関するロシア語史料集が多数刊行されているのも、研究の呼び水になっている。Бугай(1998)は巻末に関連史料が付録として掲載されているが、これ以外に彼が編纂した史料集が3冊ある^(註4)。一方、旧ソ連の朝鮮人研究者が総力をあげて編纂したのが、『30~40年代のロシアにおける朝鮮人強制移住に関する白書』(以下『白書』と略記)である。1992年に第1巻が、1997年に第2巻が出版された[Ли и Ким 1992; 1997]。このほか、『カザフ

スタン韓人史』^(註5)(全3巻)[Сим Енг Соб и Ким Г.Н. 1998; 1999; 2000]が韓国の援助を受けてカザフスタンで出版された。これは朝鮮人に関する最大規模の史料集である。扱うテーマは強制移住にとどまらず、強制移住以前の極東での暮らしや、移住後のカザフスタンでの様子などを知る貴重な情報源になっている。また強制移住の回想録もいくつか出版されている[Тян 1997, Ким А. 2002]。

強制移住を中心に発展した朝鮮人研究だが、1990年代半ば以降は、それ以外の時期・問題点にも関心が拡大している。主だったものを挙げると、ボリス・パクは帝政時代(1850~1860年代から1917年2月まで)[Пак 1994]、およびソ連時代(1917年から1930年代末まで、ただし強制移住を扱った第7章のみ、Ли В. Ф. が執筆)[Пак 1995]のモノグラフをそれぞれ出版している。またソ連時代については、Бэ Ын Гиён(2001)も著作を発表している。いずれもアーカイブ史料や朝鮮語新聞をふんだんに利用した、水準の高い研究である。史料集も、ウラジオストクのロシア国立歴史文書館極東支部が所蔵する帝政時代の朝鮮人関連文書を紹介したТоропов(2001)や、ソ連時代(1937年まで)の中央や地方の新聞雑誌の朝鮮人関連記事を集成したВашин(2004)が出ている。このほか日本では、和田・劉・水野(2001)が共産党史料に基づくコミンテルン朝鮮人活動家の研究に取り組んでいる。

なおロシア政府は2004年を朝鮮人のロシア移住140年の記念年として祝ったが^(註6)、これにあわせた記念の出版物がこの前後に相次いだ。ボリス・パクとブガイというこの分野の大御所の共著『ロシアでの140年——ロシア朝鮮人概史——』[Пак и Бугай 2004]は、巻頭に移住140年を祝う政府命令を掲載していることとあわせ、事実上の公式歴史書と見ることもできよう(1937年を境に、前半をパクが、後半をブガイが執筆)。一方、民間の朝鮮人研究者は、『ロシア朝鮮人百科事典——ロシアでの140年——』[Цой 2003]を総力をあげて完成させた。索引事典ではなく、ひとりまたは複数の執筆者が「歴史」「強制移住」「ロシアの朝鮮人団体」「風俗、習慣、家系」などのテーマで書いた全15章の論文形式の文章で構

成されている（総ページ数1440ページ）。

近年の研究関心の拡大は、文献目録からも明らかである。Kim and King (2001) が作成した朝鮮人研究文献目録（1990～2000年）は、あわせて700点近い単行本・雑誌論文をリストアップしている（サハリン朝鮮人を含む）^(註7)。

さて、以上の先行研究を概観すると、大きく言って、2つの特徴を指摘できる。第1の特徴はソ連崩壊後の国境による研究分断であり、第2の特徴は戦後史の空白である。

まず前者を見よう。すでに指摘したように、朝鮮人の主な居住地は1937年の強制移住までがロシア極東、それ以降は中央アジア（ウズベキスタンとカザフスタン）およびロシア^(註8)である。周知のように、これらの国々は、ソ連崩壊によってそれぞれ別々の国になった。ソ連崩壊直後はそれほどでもなかったが、最近はこの新たな国境線が研究者の問題関心を規定する傾向が強まっている。

まず最初にこの傾向が目についたのは、カザフスタンである。カンが『カザフスタン朝鮮人史』[Кан 1995]の最初の章で、強制移住以前にカザフスタンへ移住した朝鮮人の動向を詳述した。この問題は、1937年の強制移住による移動とは比べものにならないごく少数の移動であったため、これまでの研究では些細な事象として看過されてきた。カンがこの少数の移動に着目したのは、明らかに、カザフスタンという国境を研究枠に据えたことに起因している。

その一方で、1990年代半ばの時点では、まだ旧ソ連全体を統一空間として認識する研究者も根強く存在した。その好例が、ボリス・バクの『ソビエト・ロシアの朝鮮人（1917年～30年代末）』[Пак 1995]である。バクは序文でこの本を、旧ソ連地域の朝鮮人研究者による「朝鮮人とロシア・ソ連・CIS (Корейцы в судьбе России, СССР и СНГ)」という全3巻のシリーズ本の第2巻として位置づけるとともに、引き続いて帝政時代を扱った第1巻（M.H.バク編集責任）、強制移住以降を扱った第3巻（E.Y.キム編集責任）が出版されると予告していた [Пак 1995, 3]。しかしこの旧ソ連全体を包括する研究プロジェクトは、実現しなかったようである。評者が

モスクワの図書館で検索した限り、前記に該当する書籍は発見できなかった。

そして、この「朝鮮人とロシア・ソ連・CIS」シリーズの流産と軌を一にするように、ロシアでも現在の国境線に対象を絞った研究が主流に躍り出る。先に近年のロシアでの研究を紹介したが、それらに共通するのは、ロシア極東時代の朝鮮人（帝政時代、ソ連時代なら1937年の強制移住以前）については研究が積み重ねられる一方で、1937年以降の中央アジアでの様子は、強制移住直後の定着の様子を除いては、さして関心が払われていないという点である。

特徴的なのは、2004年のロシア移住140年にあわせて出版された一連の著作であろう。パクとブガイの『ロシアでの140年』[Пак и Бугай 2004]は、強制移住および中央アジア定着までは非常に詳しく、また独ソ戦時の貢献にもそれなりの分量を割いている。しかし戦後史はほとんど空白のまま一足飛びで進行し、突然ベレストロイカ期および新生ロシアにおける状況の叙述に移っている。多少の誇張を交えて言えば、1937年で歴史が1度中断し、1991年から再開するという、構成のいびつさを抱えているのである。

そこで問題になるのが、先行研究に共通する2番目の傾向として指摘した、戦後史の空白である。もちろん前述のカンのように、戦後史に正面から取り組んだ研究も存在する。しかし、こと近年のロシアで発表された研究について言えば、戦後史はほとんど看過に等しい扱いを受けている。

ここでは、強制移住の対象となった他の諸民族と比べると、朝鮮人には大きな政治的事件が乏しかったという事情を考慮すべきかもしれない。チェチェン人などのように、1956年2月のフルシチョフ秘密報告での言及や1957年1月の自治共和国再建といった耳目を惹く出来事はなかったし^(註9)、ドイツ人やクリミア・タタール人のように、自治共和国の再建を求める根強い民族運動が戦後に展開されたわけでもない^(註10)。朝鮮人の場合、居住地制限はすでに1953年に解除されており、強制移住の汚名を除けば、彼らは一般市民と同じ法律上の権利を享受していた [半谷 2004]。このため、政治史的なアプローチをと

る場合、朝鮮人の戦後史が描きにくいのは事実である。

しかし、そうした困難さにもかかわらず、やはり戦後という近い過去を現代にうまく接続させる適切な歴史叙述の試みがなされていないのは、もどかしさを感じる。またロシアの研究者には、朝鮮人の多くが中央アジアにすんでいた戦後を、自国史の一部として扱いかねているようにも思える。ただ朝鮮人の戦後史は、今後の大きな課題であることは間違いない。そこで参考までに、評者が萌芽として抱えている研究アプローチのアイデアをいくつか記しておきたい。

まず、政治的に大きな事件がなければ、歴史が描けないというわけではない。例えば1950年代以降、中央アジアからロシアへの移住がはじまっており、1989年の国勢調査ではロシアの朝鮮人人口はカザフスタンと同規模にまで達した。こうした長期的な人口移動は、人口学などのアプローチを適用することで取り扱い可能なテーマである。

一方、純粋に政治史のアプローチであれば、例えば、ソ連の対北朝鮮政策とソ連朝鮮人との関係という大きな問題がある。ロシアの北朝鮮研究者ランコフによると、ソ連朝鮮人は「衛星国」の人材不足を補うために北朝鮮に派遣され、朝鮮労働党・政府・諜報機関などで重要な地位について、大きな政治的役割を果たしていたという〔Ланьков 2005, 174-200〕。また、その規模は、1949年時で約400人だったが、これは当時、ソ連朝鮮人で共産党員だったほぼすべてを動員した結果だった。ただし、北朝鮮では1958年からソ連出身者の迫害・追放が始まるため、対北朝鮮関係から見た朝鮮人問題は戦後史の15年ほどを彩るテーマにすぎない。また外交関係の史料は近年のロシアでは公開に大きな制限が課されており、研究には難航が予想される。それでも、空白の戦後史を埋めるテーマとして、追求されるべき課題のひとつであろう。

以上は対象を朝鮮人に限定した研究について述べてきたが、最後に、民族強制移住の研究における朝鮮人問題にも触れておきたい。強制移住研究は、ペレストロイカ以降、基本的な事実解明に重点が置か

れていたが、近年は、そうした成果を土台として、いくつもの民族強制移住を相互に比較したり、新たな文脈から読み解くことも盛んに行われている〔Полян 2001; Земсков 2003; Эдиев 2003〕。中でも出色は、ソ連の民族政策をアフーマティブ・アクションをキーワードに読み解いたアメリカの研究者Martin (2001) であろう。彼は、社会主義的「民族」を上から創出するnation buildingの政策が、国内外の情勢変化の結果、強制移住というnation destroyingをもたらしたという興味深い議論を展開している。また朝鮮人問題に限っても、朝鮮人の強制移住を命じた1937年8月21日付の党・政府決定の草案をアーカイブで発見し、紹介している^(註11)。こうした最近の研究は示唆に富み、新たな視点から朝鮮人問題に取り組む刺激となっている。

III 本書の貢献と問題点

1. 前半部分

本書の最大の学問的貢献は、著者が指摘するように「ソ連時代には閲覧が不可能であった秘密文書を発掘し分析」(8ページ)した点にある。それ以前に朝鮮人の強制移住問題を扱った研究は日本ではいくつか存在したが、著者ほどの規模でアーカイブ史料を用いた例はなかった。しかも、ロシアだけでなく、カザフスタンの中央および地方アーカイブの史料も用いており、史料発掘の幅が広い。ただ上に見たように、本書出版と前後して、特にロシアで新しい研究成果が次々と公表されており、アーカイブ史料の利用の有無が評価を決める時代は過ぎ去った。しかしいずれにせよ、日本語で発表された朝鮮人研究の一里塚として、本書はしかるべき評価を与えられるべきである。

こうした基本的な評価を踏まえた上で、本書の問題点をいくつか指摘しておきたい。

まず著者の先行研究の紹介には遺漏が多い。強制移住に関して言えば、和田(2003)による前述の研究史紹介に挙げられた日本語の文献の多くが、参考文献に挙げられていない。事情は、1860年代から1930年代までの極東における朝鮮人の状況を扱った

第1章でも同じである^(註12)。また、著者は日本と韓国における研究動向についてしか触れていないが、ロシア極東と中央アジアを舞台とする本書の性格上、ロシア語の先行研究への言及および基本文献の紹介と研究史上への位置づけについて、著者の見解を示すべきではなかったか。

次に著者が用いたアーカイブ史料の多くは、本書の出版の前から、すでに刊行史料集や他の研究書で紹介されている^(註13)。すでに紹介済みの史料だから価値がないというわけではないが、先行研究と同じく、読者の理解を助けるためにも、刊行済みか否かは明記すべきだろう。なお著者の史料解釈には、先行研究を大きく修正・補足する論点は打ち出されていないように思える。特に中央アジアでの定着の様子を扱った第3章第3節は、前述のCANのモノグラフと、その事例の選択・配列・内容の点で大差なく、まったく同一物であるかの印象を受ける。一方、史料の選択について言えば、1937年9月22日のチェルヌイシヨフ内部人民委員代理のメモを紹介しなかったのは、明らかな失点である。これは、朝鮮人は「親族のつながりが極めて強い」ので一部でも極東に残しておくことは危険であると進言したもので、強制移住が民族「丸ごと」を対象とするようになった契機としてどの研究者も引用している。

こうした主に事実関係に関連する問題点の一方で、どういう視点から歴史像を構築するかについて、著者の考えが未整理な点が気になった。評者は前節で、朝鮮人研究の国境線による分断傾向について言及し、その特徴的事例としてカザフスタンでの強制移住以前の小規模の移住の強調およびロシアでの戦後史叙述の空白を挙げた。これは、ソ連崩壊後の新しい国境線がそれぞれの国の歴史家の問題関心を規定したためであり、ある程度の必然性が感じられる。しかし著者が第3章の第1節で強制移住以前のカザフスタンへの小規模の移住を詳述しているのは、納得がいかない。第3章が「強制移住後のカザフスタン朝鮮人社会」と題されているにもかかわらず、強制移住以前の時代に遡った叙述をすること自体がまず不自然である。さらに、1937年以前のわずか数百人規模の朝鮮人移住と、1937年の17万人におよぶ強制移

住に直接の因果関係はないのだから、第1章と第2章でロシア極東の動向を詳述した後は、そのまま中央アジアでの強制移住後の定着について叙述する方が自然な流れではないだろうか。これでは、ロシアとカザフスタンの先行研究の安易な折衷とみなされてもしかたがないように思う。

評者は、特にソ連時代の朝鮮人の歴史を描く場合、当時は統一空間として維持されていたソ連という枠組みを前提として研究をすべきではないかと考えている。著者のように現在の国境線を過去に安易に投影させると、歴史を見誤る可能性がある。現在の国境を越える視点は、ロシアやカザフスタンの研究者には難しいのかもしれない。であるなら、これは外国人であるわたしたちが、現地研究者に対して存在価値を主張できる有効な手立てではないだろうか。

2. 後半部分

本書の後半部分は、ゴボンジルに代表される朝鮮人の農業経営と、民族問題という2つの異なるテーマを扱っているが、重点は前者に置かれている。筆者はゴボンジルを「営農の主体である朝鮮人が家族単位で構成された小共同体（ブリガダ）を組織し、農業期間に自分の居住地を離れ、近距離あるいは遠距離で土地を賃借し、生産から販売に至る営農の全過程を実行する『出稼ぎ請負農業』」（124ページ）と定義している。数カ月に及ぶ仮住まいでの生活を余儀なくされ、それなりの投資が必要なことからリスクもあったが、成功すると高い収益をあげることができたため、多くの朝鮮人がこれに携わっていた。著者は「ゴボンジルは、社会主義体制下において資本主義的な特徴を持つ営農方式および運営単位であり、朝鮮人が高い地位を築いたことと関連して非常に重要である」（8ページ）と指摘している。なお、このような出稼ぎは現在も続けられている。

本書で繰り返し述べられているように、ゴボンジルは朝鮮人の生活のなかで重要な位置を占めており、またソ連の農業生産の実態を見るうえでも興味深いテーマであるにもかかわらず、いままでほとんど研究されてこなかった^(註14)。豊富なフィールドワークに基づいた著者の研究は、この分野において先駆的な意味もっている。

しかし評者がまず問題視するのは、著者のゴボンジル研究のうち、どこまでが著者独自の研究なのか判然としない点である。同じくゴボンジルに注目している数少ない研究者のひとりに、白泰鉉がいる^(註15)。韓国出身の白はクルグズスタン(キルギス)に長期滞在し、朝鮮人コミュニティを対象とした調査を行ってきた。著者は白と共同で、「中央アジア高麗人のゴボンジル」というタイトルの朝鮮語論文[백・이 2000]を発表している。この論文は本書と密接な関係があると思われるが^(註16)、参考文献リストには挙げられていない。本書は白の単著論文とのあいだでも、内容の重複が見られる。著者は註および参考文献で、백(1999a)^(註17)に言及しているが、白にはそれ以外に、백(1999b; 2001)およびBack(2001)がある^(註18)。結論を言えば、本書第4章と第5章のうち、백・이(2000)および白論文のいずれとも内容的に重ならないのは、第4章第3節のみである。

さらに調査対象地域について、著者は第4章で「ゴボンジルに関しては、カザフスタンだけに限定して実態を究明するのは限界があるため、中央アジア全域で考えることとする」(122ページ)と断っている。しかし、この章に登場するインタビュー調査のインフォーマントは、本文で紹介されているひとりを除き(127ページ)、註を見る限り全員がクルグズスタン在住である^(註19)。他方、第5章の具体例はカザフスタンのものもあるが、第3節(4)の「調査事例」(192ページ)ではクルグズスタンの村がとりあげられている。

なお、中央アジア全体を視野に入れつつ、カザフスタン(あるいはクルグズスタン)の事例を詳しく調査することが著者の狙いであったならば、ウズベキスタンとの比較にも若干言及して欲しかった^(註20)。独立後、経済改革に前向きに取り組んできたカザフスタンおよびクルグズスタンと、漸進主義をとるウズベキスタンとは、農業・土地政策がかなり異なっているだけに、ゴボンジルに携わる朝鮮人たちが抱える問題にも違いがあるのではないだろうか。もっとも、そのような比較は、それぞれ国内でゴボンジルを行う場合に限られよう。

「本書の構成・内容」で述べたように、第4章と

第5章の一部は、民族アイデンティティの問題に割かれている。しかし、それを論じた2つの節(第4章第3節「ソ連体制下での朝鮮人の民族的アイデンティティ」および第5章第2節「カザフスタンの民族問題と朝鮮人の意識変化」)は分量が少なく、内容的にも前後の節と論理的つながりが弱い。また、第4章第3節は言語問題に焦点をあてているが、データの解釈にやや問題がある。著者はここで韓国の研究者の論文^(註21)に依拠して「1989年には、ついに朝鮮人の半数が韓国語^(註22)の能力を喪失した」(159ページ)と述べている。確かに、1989年のソ連国勢調査によれば、朝鮮語を母語と申告した人は全体の53.0パーセントであった[USSR(1989) 1996]。筆者はさらに「このような資料でおおよその傾向を把握することは可能であるが……正確な状況が反映されているとは考えにくい。ソ連時代、ロシア民族中心の視点で行われた調査である可能性が排除できないのである」(160ページ)と述べ、朝鮮人のあいだの実際の朝鮮語使用能力が、これよりも高かった可能性を示唆している。しかし現実はその逆である。ソ連末期、高齢者を除く朝鮮人のほとんどは朝鮮語を話すことができなかった^(註23)。ソ連時代の国勢調査では、非ロシア人が自分の民族語を、それを操る能力如何にかかわらず、母語として申告するという傾向が見られたため、データの扱いには注意を要する^(註24)。なお、カザフスタンでは1999年に独立後初の国勢調査が実施されている^(註25)。本書の出版時期を考えると、それにも言及すべきではなかったか。

さて、第6章は、1996年および1999年のアンケート調査に基づいて書かれている。1999年の調査は著者自身が実施したものである。一方、1996年の調査については、著者はカザフスタン朝鮮人協会と東洋学研究所が共同で行ったものであると述べ、出典は示していない(201ページ)^(註26)。第6章の内容は一定の資料的価値はあるものの、分析や解説はほとんどなされていない。調査結果を著者なりに解釈しているところも若干あるが、その根拠が示されていないため説得力を欠く。

ここでの問題のひとつは、著者がカザフスタン政府の民族政策にほとんど言及していないという点に

ある^(注27)。例えば、著者は「民族関係の改善策については、1996年と1999年の結果に大きな差がある」と述べ、ロシア語の公用語化（より正確には国家語〈государственный язык〉化）を求める意見が33.4パーセントから7.9パーセントへ大きく低下したと指摘している（209ページ）。そもそもアンケート調査の結果は、質問項目のたて方や文言、サンプルの抽出方法など、さまざまな要素に左右されるが、著者は調査方法を明らかにしていない。そのため、1996年と1999年の調査結果が比較可能なのかという疑問は残る。しかし、もしも朝鮮人のあいだでロシア語の国家語化要求が実際に弱まっているのだとすれば、その理由のひとつに、国家語をめぐる社会状況の変化を挙げることができよう。カザフスタンでは、ソ連末期（1989年）にカザフ語が国家語と規定されて以来、ロシア語を母語とする住民のあいだでロシア語の国家語化を求める声が根強く存在した。しかし、1993年憲法、1995年憲法、さらに1997年言語法の制定を通じて、唯一の国家語としてのカザフ語の地位は既成事実化した。他方、公的機関におけるカザフ語使用の義務化が、当初危ぶまれたほど拙速なものではないということについての理解がある程度広まったため、1990年代後半以降、言語論争は下火になったのである^(注28)。

おわりに

著者は、カザフスタンの朝鮮人の歴史と現在を、歴史・社会学的手法を駆使しながら包括的に捉えようとした。「同質的な民族国家を自明のものと考えてきた、韓国的な発想」（230ページ）に警鐘を鳴らす著者の念頭にあるのは、韓国の人々であろうが、この指摘は単一民族神話が根強い日本の読者にも無縁ではない。「ダイナミックに展開するカザフスタン朝鮮人社会の実像を……ありのままにとらえる姿勢」（230ページ）が重要であることについては、我々も同意する。

しかし、本書は先行研究への理解が十分であるとは言えず、それらと比べての特色も明らかではない。無論、さまざまなディシプリンにまたがる学際的な

手法が、効果的である場合も少なくない。だが本書について言えば、扱うテーマが広すぎ、結果としてそれぞれの掘り下げ方が浅くなってしまった感は否めない。

上述したように、ソ連の朝鮮人に関する歴史研究は、近年、研究の蓄積が着実に増えつつある。それに対して、ソ連崩壊後の朝鮮人社会についての研究は、まだ緒についたばかりである。とはいえ、たとえば朝鮮人団体の活動に関する資料・論文集としては、カザフスタンではХан（1997）、Цхай и др.（2000）およびЛьвокова и др.（2004）などが、ロシアでは上述のЦой（2003）のほかБугай（2002）、Бугай и Сим（2004）が出されており、ペレストロイカ期以降の民族運動の歩みを辿ることができる。管見の限り、最大の朝鮮人人口を抱えるウズベキスタンにおける出版活動はロシアとカザフスタンには及ばないものの、ウズベキスタン朝鮮人文化センターも設立十周年を記念した論文集を発行している〔Хан 2001〕。これらは旧ソ連における朝鮮人民族運動を研究する際に、ひとつの手がかりを与えてくれるだろう^(注29)。

旧ソ連朝鮮人の現在を分析するにあたっては、次の2つの切り口が重要であろう。第1は、各国に居住する他の少数民族との比較である。中央アジア諸国およびロシアは、いずれも様々な民族からなる多民族国家であり、個別の民族に関する豊富な先行研究が存在する。他の民族との比較を通じて、朝鮮人が置かれた状況や彼らが抱える問題を、より客観的に捉えることができるだろう（このような視点は歴史研究にも有効である）。第2に、異なる国家に居住する朝鮮人の横断的比較が挙げられよう。旧ソ連諸国が歩んできた道のりには、共通する部分があるものの相違点も少なくない。各国の朝鮮人の現状を比較分析することにより、各々の政策の違いとその影響、ソ連崩壊がもたらした朝鮮人社会の分断およびその多様化とともに、国境を超えた朝鮮人のネットワークのあり方が見えてくるのではないだろうか。

（注1） 本稿では、「朝鮮人」を民族名称として用いる。ちなみに「朝鮮人」はロシア語ではкорейцы（複数形）で、旧ソ連朝鮮人の自称として高麗人（Kore

saram, Koryō saram) も使われる。

(注2) ロシア極東は、現在の行政区分でサハ共和国、沿海地方、ハバロフスク地方、アムール州、カムチャッカ州、マガダン州、サハリン州、ユダヤ自治州、チュクチ自治管区、コリヤーク自治管区で構成されるロシア東部の地域を指す。ただし歴史的には、「極東」に含まれる領域は時代によって異なる〔藤本 2004, 187〕。

(注3) 序章にある「本書の構成」によれば、第4章はソ連時代、第5章はソ連崩壊後を対象とされているが、実際には第4章にも独立後のゴボンジルに関する記述が登場する。さらに第4章について著者は、「スターリンの死からソ連の解体までを4段階に分けて考察」(8ページ)すると述べているが、章全体としてそのような時代区分はなされていない。なお第2節(1)の2)「ソ連時代のゴボンジルの推移」は、ペレストロイカ以前と以後の2つの時期に分けられている。

(注4) Бугай (2004) は朝鮮人に限定しているが、これ以外に朝鮮人を含むものとしてБугай (1992), Бугай и Гонов (2003) がある。

(注5) これは朝鮮語のタイトルである。

(注6) 最初の移住の年が、かつての定説だった1863年から1864年に訂正された経緯については、Бугай (2004, 27-30) を参照。

(注7) その他の文献目録として、Ким Г.Н. (2000) も参照。

(注8) 強制移住後の居住地制限が解除されたあと、極東への大規模な帰還の動きはおきなかったものの、ロシアの他の地域へ移住した朝鮮人は少なくない。1989年のソ連国勢調査によれば、朝鮮人人口はソ連全体で43万8650人、そのうちウズベキスタンが18万3140人、ロシア10万7051人(うちサハリン州3万5191人)、カザフスタン10万3315人であった。なお最近の国勢調査によれば、カザフスタンの朝鮮人人口は9万9665人(1999年)、ロシアの朝鮮人人口は14万8556人(2002年)である。ウズベキスタンでは独立後に国勢調査は行われていないが、Dadabaev (2004, 43) は2002年の朝鮮人人口を16万9600人としている。

(注9) 1957年の北カフカス諸民族の自治領再建に

ついては、Ханья (2005) を参照。

(注10) ドイツ人については半谷 (1999) および Ханья (2003) を、クリミア・タタール人については山内 (1995, 202-224) およびUehling (2004) を参照。

(注11) 評者も最近この史料を閲覧したが、アーカイブ内で史料の再配置がおこなわれたためか、マーチンの史料出典(РГВА, ф.33879, оп.2, л.181)に相当する文書は存在しなかった(Martin 2001, 334)。現在の整理番号は、次のとおり: РГВА, ф.33879, оп.1, л.115。

(注12) なかでも、ロシア革命期に誕生した朝鮮人自治組織と朝鮮人社会主義運動を扱った第1章第2節には註が全く付されていないため、著者がいかなる先行研究あるいは史料に基づき執筆したかは不明である。なお、このテーマに関連する日本語の先行研究に、原 (1977) および劉 (1985; 1987; 1992; 1993a; 1993b) がある。このうち、本書の参考文献では劉 (1985) のみが挙げられている。なお著者は、原の研究に序で言及しているが(6ページ)、参考文献には載せていない。

(注13) 著者が文書館に赴いて史料を読んだのか、刊行史料集を引き写したのか、判然としない箇所がある。1937年8月21日付党・政府決定の出典を、著者は第2章の註10で「ЦГАОР, ф.5446, оп.57」と記している。しかし、これはアーカイブ史料の引用形式としては不備があるほか(通常は「ф.**.оп.**.л.**.л.**」の形式をとる)、「ЦГАОР」(中央国立十月革命文書館)は1992年4月にロシア連邦国立文書館(ГАРФ)に衣替えしており、出典として少し不自然である。各種史料集(『白書』第1巻、『カザフスタン韓人史』第1巻)に収録された8月21日付決定をみると、その出典が、著者が註10で挙げたのと同じ「ЦГАОР, Фонд 5446, оп.57」となっている。なお、本書にはアーカイブ史料の写真が多数掲載されている(計9ページ, 10点)が、これは本書xページ(序文の直前)に指摘されているように、すべて先行文献の転用である。

(注14) 学術書ではないが、ゴボンジルに関するロシア語文献にЛи (2000) がある。

(注15) クルグズスタン・ビシユケク人文大学教授(2004年12月現在)。

(注16) 本書第4章第2節および第5章第3節(4)と(5)は、順序が入れ替わっているところがあるもの

の、全体としてㄱ・이 (2000) とほぼ同じ構成である。また、第5章の表5-2「調査したゴボンジル現場の人的構成」(192ページ)は、表1「ㄱ・이 2000, 101」と同一といってよい。

(注17) この未刊行論文は、その後和訳が出た〔白2003〕。なお著者は1999年末、本書第5章にほぼ相当する日本語の論文を発表している〔李1999〕。李(1999)と白(2003)とは内容的に重なる部分が多いが、明らかな相違点は、白論文で「中央アジア」と書かれているところが、李論文では「カザフスタン」になっているという点である。

(注18) 評者は、Back (2001) はその内容を確認したが、ㄱ (1999b; 2001) は入手していない。

(注19) 面談者の居住地が示されているのは、註8, 9, 14, 17である。註8と註10にある「チェ・ワレンチン」はおそらく同一人物であろう。註15の「許ワレンチン(48歳)」も、第5章の「調査事例」(192ページ)によればビシュケク在住である。

(注20) ウズベキスタンは旧ソ連最大の朝鮮人人口を抱えており、またその産業構造上、カザフスタンよりも農業がより重要な位置を占めている。なお上述の「調査事例」には、ゴボンジルを行うため、ウズベキスタンからクルグズスタンにやってきた人々が含まれている。

(注21) 本書に引用されているデータは、1959年、1970年、1979年、1989年のものである。これらはソ連国勢調査が実施された年と一致するため、この韓国人研究者はソ連国勢調査の結果を利用しているものと推察される。

(注22) 著者は、この節で「朝鮮語」と「韓国語」をコメント抜きで併記している。

(注23) この点については例えば、現代語学塾『レーニン・キチ』を読む会(1991)の第Ⅲ章・第Ⅳ章を参照。

(注24) この点については例えば、Arel (2002) を参照。

(注25) 自己申告によれば、ロシア語を習得していると答えたのは朝鮮人全体の97.7パーセント、朝鮮語は25.8パーセントであった〔Агентство Республики Казахстан по статистике 2000, 9〕。なお、1999年国勢調

査では、国家語(カザフ語)の習得・学習状況、および習得しているその他の言語について尋ねており、母語に関する質問項目はなかった。朝鮮人の使用言語に関する1989年ソ連国勢調査と1999年カザフスタン国勢調査の結果の比較については、Oka (2001, 205-206) 参照。なおこの論文はOka (2001) のロシア語訳であるが、言語問題に関する誤った記述〔Oka 2001, 111 note 22〕はロシア語版では訂正されている。

(注26) この調査は、実施時期、サンプル、質問事項および結果から判断して、カザフスタン民族間関係モニタリング・センターが実施した調査〔Масанов 1997〕と同一のものと推察される。

(注27) 著者は第5章の註5で「1990年に始まったカザフ語中心の単一言語政策」に言及し、この政策は「一時的に緩和されたが、1998年以降、再び強化される傾向にある」(198ページ)と述べている。しかし、根拠となる法令などには全く触れていない。

(注28) これについてはDave (2004) を参照。

(注29) ベレストロイカ期以降の朝鮮人民族運動について述べたものにKim and Khan (2001) がある。タイトルは「カザフスタンの朝鮮人運動」であるが、旧ソ連全体の動向もある程度カバーしている。

文献リスト

<日本語文献>

- 岡奈津子 1998a. 「ロシア極東の朝鮮人——ソビエト民族政策と強制移住——」『スラヴ研究』(45) 163-196.
- 1998b. 「ソ連における朝鮮人強制移住——ロシア極東から中央アジアへ——」『岩波講座世界歴史第24巻 解放の光と影 1930年代-40年代』岩波書店 65-90.
- 現代語学塾『レーニン・キチ』を読む会(編訳) 1991. 『在ソ朝鮮人のベレストロイカ』凱風社。
- 原暉之 1977. 「ロシア革命、シベリア戦争と朝鮮独立運動」菊地昌典編『ロシア革命論——歴史の復権——』田畑書店 171-216.
- 半谷史郎 1999. 「ソ連ドイツ人の自治区復活運動と西ドイツ出国——戦後のカザフスタンを中心に

- 』『ロシア史研究』(65) 40-56.
- 2004. 「フルシチョフ秘密報告と民族強制移住——クリミア・タタール人, ドイツ人, 朝鮮人の問題積み残し——」『ロシア史研究』(75) 85-100.
- 白泰鉉 2003. 「中央アジアの高麗人の社会経済的特性」(堀内稔・訳) 徐龍達編『21世紀韓朝鮮人の共生ビジョン——中央アジア・ロシア・日本の韓朝鮮人問題——』日本評論社 472-492.
- 藤本和貴夫 2004 「極東」『[新版] ロシアを知る事典』平凡社 187-188.
- 山内昌之 1995. 『瀕死のリヴァイアサン』講談社学術文庫.
- 劉孝鐘 1985 「極東ロシアにおける朝鮮民族運動——『韓国併合』から第一次世界大戦の勃発まで——」『朝鮮史研究会論文集』(22) 135-166.
- 1987 「極東ロシアにおける10月革命と朝鮮人社会」『ロシア史研究』(45) 23-51.
- 1992 「2月革命と極東ロシアの朝鮮人社会」中村喜和編『ロシアと日本』(3) 61-82.
- 1993a 「シベリア戦争とロシアの朝鮮人」ロシア史研究会編『日露200年——隣国ロシアとの交流史——』彩流社 141-161.
- 1993b 「チェコスロヴァキア軍団と朝鮮民族運動——極東ロシアにおける三・一運動の形成——」ソビエト史研究会編『旧ソ連の民族問題』木鐸社 109-163.
- 李愛俐娥 1999. 「カザフスタンの独立と朝鮮人社会の変化」『中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響——1998年調査報告書——』(JRAK調査報告書 No.7) 日本カザフ研究会 (12月) 57-92.
- 2000. 「社会変動下にある少数民族の適応に関する実証的研究——カザフスタンにおける朝鮮人社会を事例として——」京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文.
- 和田春樹 2003. 「ロシア沿海州からの韓朝鮮人の強制移住」徐編『21世紀韓朝鮮人の共生ビジョン』442-444.
- 和田春樹・劉孝鐘・水野直樹 2001. 「コミンテルンと朝鮮——コミンテルン文書資料に基づく若干の考察——」『青丘学術論集』(18) 181-243.
- <朝鮮語文献>
- 백태현 1999a. “중앙아시아 고려인의 사회경제적 특성.” [中央アジア高麗人の社会経済的特性] 神戸学生青年センター発表論文 (1月).
- 1999b. “Socioeconomic changes in Kazakhstan and Korean society - Focusing on the Karatal raion.” 『아시아文化研究』(4). 목포: 목포대학교 아시아문화연구소. この書誌情報はBack (2001) の文献リストによる。論文タイトルのみが英語だが, “In Korean” と注意書きがある。
- 2001. 「中央アジア高麗人の社会経済生活」『中央アジア高麗人の社会・文化生活と民族性に関する研究』(財) 韓国在外同胞財団. この書誌情報は徐 (2003) 巻末の業績リスト (和訳のみ) による。論文, 本のタイトルに続けて「リ・エリア共著」とあり, 論文と本のいずれが共著なのかははっきりしないが, おそらく本のことを指しているものとみられる。出版地は不明。
- 백태현・이애리아 2000. “중앙아시아 고려인의 고본질” [中央アジア高麗人のゴボンジル] 『비교문화연구』6(1): 63-131. 서울: 서울대학교 비교문화연구소.
- <英語文献>
- Arel, Dominique 2002. “Language Categories in Censuses: Backward- or Forward-looking?” In *Census and Identity: The Politics of Race, Ethnicity, and Language in National Censuses*. eds. David I. Kertzer and Dominique Arel, 92-120. Cambridge: Cambridge University Press.
- Back, Tae Hyeon 2001. “The Social Reality Faced by Ethnic Koreans in Central Asia.” *Koryō Saram: Koreans in the Former USSR (Korean and Korean American Studies Bulletin)* 12(2/3): 45-88.
- Dadabaev, Timur 2004. *Post-Soviet Realities of Uzbekistani Society*. IOC Discussion Papers (37) (March). Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

- Dave, Bhavna 2004. "A Shrinking Reach of the State? Language Policy and Implementation in Kazakhstan and Kyrgyzstan." In *The Transformation of Central Asia: States and Societies from Soviet Rule to Independence*. ed. Pauline Jones Luong, 120-155. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Kim, German N. and V. S. Khan 2001. "The Korean Movement in Kazakhstan: Ten Years Later." *Koryō Saram: Koreans in the Former USSR (Korean and Korean American Studies Bulletin)* 12(2/3): 114-140.
- Kim, German N. and Ross King 2001. "The Koryō Saram: An Annotated Bibliography, 1990-2000." *Koryō Saram: Koreans in the Former USSR (Korean and Korean American Studies Bulletin)* 12(2/3): 141-189.
- Martin, Terry 2001. *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Oka, Natsuko 2001. "The Korean Diaspora in Nationalizing Kazakhstan: Strategies for Survival as an Ethnic Minority." *Koryō Saram: Koreans in the Former USSR (Korean and Korean American Studies Bulletin)* 12(2/3): 89-113.
- Uehling, Greta Lynn 2004. *Beyond Memory: The Crimean Tatars' Deportation and Return*. New York: Palgrave Macmillan.
- USSR(1989) 1996. *1989 USSR Population Census*. (CD-ROM). Minneapolis: East View Publications.
- <ロシア語文献>
- Агентство Республики Казахстан по статистике 2000. [Казахстан Республикасының Статистика Бюросы] Национальный состав населения Республики Казахстан. Том 2 (Население Республики Казахстан по национальностям и владению языками). [Казахстан Республикасының Халық Саны және Тілдерінің Қолданылуы]. Алматы: Қазақстан Республикасының Статистика Бюросы, 2000.
- Бэ Ын Гиёнг 2001. Краткий очерк истории советских корейцев (1922-1938). [ソ連朝鮮人概史 (1922～1938年)] Москва: Издательство Московского университета.
- Бугай Н.Ф. (сост.) 1992. Иосиф Сталин – Лаврентий Берии: «Их надо депортировать...»: Документы, факты, комментарии. [ヨシフ・スターリンからラヴレンチー・ベリヤへ「彼らを強制移住せよ……」文書・事実・論評] Москва: Дружба народов.
- 1998. Социальная натурализация и этническая мобилизация (опыт корейцев России). [社会的帰化と民族動員——ロシアの朝鮮人の経験——] Москва: ЦИМО.
- 2002. Российские корейцы и политика «солнечного тепла». [ロシア朝鮮人と太陽政策] Москва: Готика.
- (ред.) 2004. Корейцы в Союзе ССР–России: XX-й век (История в документах). [20世紀ソ連・ロシアの朝鮮人——文書からみた歴史——] Москва: Инсан.
- Бугай Н.Ф., Гонов А.М. 2003. «По решению правительства Союза ССР...» [「ソ連政府の決定により……」] Нальчик: Издательский центр «Эльфа».
- Бугай Н.Ф., Сим Хон Енг 2004. Общественные объединения корейцев России: конститутивность, эволюция, признание. [ロシア朝鮮人の社会团体——構成・発展・承認——] Москва: Новый хронограф.
- Ванин Ю.В. (отв.ред.) 2004. Корейцы в СССР: Материалы советской печати 1918-1937гг. [ソ連の朝鮮人——1918年から1937年のソ連の雑誌新聞記事——] Москва: Институт востоковедения РАН.
- Земсков В.Н. 2003. Спецпоселенцы в СССР 1930-1960. [ソ連の特別入植者——1930年～1960年] Москва: Наука.
- Кан Г.В. 1995. История корейцев Казахстана. [Казахстан Республикасының Корейлерінің Тарихі] Алматы: Гылым.
- Ким А. (сост.) 2002. Туда, где кончается солнце:

- воспоминания, свидетельства, документы. [太陽の果つるところへ——回想・証言・文書——] Москва: Текст.
- Ким Г.Н. 2000. Коре Сарам: историография и библиография. [コリヨ・サラム——史学史と文献紹介——] Алматы: Казак университети.
- Ланьков А.Н. 2005. КНДР вчера и сегодня. Неформальная история Северной Кореи. [北朝鮮の過去と現在——北朝鮮私史——] Москва: Восток-Запад.
- Ли Герон Н. 2000. Гобонди: записки наблюдателя о любви корейцев к земле. [ゴボンジル——朝鮮人の土地への愛着についての観察者の記録——] Бишкек: s.n.
- Ли У Хе, Ким Ен Ун (сост.) 1992. Белая книга о депортации корейского населения России в 30-40 годах. Книга первая. [30~40年代のロシアにおける朝鮮人強制移住に関する白書 第1巻] Москва: Интерпракс.
- 1997. Белая книга о депортации корейского населения России в 30-40 годах. Книга вторая. [30~40年代のロシアにおける朝鮮人強制移住に関する白書 第2巻] Москва: МКА.
- Льдокова В., С. Назарова, М. Симбинов и др. 2004. Долгий путь к Арирану: Ассоциации корейцев Казахстана – 15 лет. [アリランへの遠い道——15周年を迎えたカザフスタン朝鮮人協会——] Алматы: s.n.
- Масанов Н. 1997. Положение этнических меньшинств в суверенном Казахстане. [独立カザフスタンでの少数民族の地位] Алматы: Фонд им. Фридриха Эберга.
- Ока Нацуко 2001. Корейцы в современном Казахстане: стратегия выживания в роли этнического меньшинства. [現代カザフスタンの朝鮮人——少数民族としての生き残り戦略——] 《Диаспоры》 2/3, 194-220.
- Пак Б.Д. 1994. Корейцы в Российской империи. [ロシア帝国の朝鮮人] Иркутск: Иркутский государственный педагогический институт.
- 1995. Корейцы в Советской России (1917 – конец 30-х годов). [ソビエト・ロシアの朝鮮人——1917~1930年代末] Москва-Иркутск: Иркутский государственный педагогический институт.
- Пак Б. Д., Бугай Н. Ф. 2004. 140 лет в России. Очерк истории российских корейцев. [ロシアでの140年——ロシア朝鮮人概史——] Москва: ИНСАН.
- Полян П.М. 2001. Не по своей воле...: История и география принудительных миграций в СССР. [自らの意思に反して……——ソ連の強制移住の歴史と地理——] Москва: ОГИ – Мемориал.
- Сим Енг Соб, Ким Г.Н. (сост.) 1998. История корейцев Казахстана: сборник архивных документов. [カザフスタン朝鮮人史 史料集] Алматы – Сеул, т.1: s.n.
- 1999. История корейцев Казахстана: сборник архивных документов. [カザフスタン朝鮮人史 史料集] Алматы – Сеул, т.2: s.n.
- 2000. История корейцев Казахстана: сборник архивных документов. [カザフスタン朝鮮人史 史料集] Алматы – Сеул, т.3: s.n.
- Торопов А.А. (отв.ред.) 2001. Корейцы на российском Дальнем Востоке (вторая половина XIX – начало XX вв.): документы и материалы. [ロシア極東の朝鮮人, 19世紀後半~20世紀初頭——文書と史料——] Владивосток: Издательство Дальневосточного университета.
- Тян В.В. (сост.) 1997. Дорогой горьких испытаний. К 60-летию депортации корейцев России. [辛酸の道のり——ロシア朝鮮人強制移住60周年によせて——] Москва: Экслибрис-Пресс.
- Федеральная служба государственной статистики. [連邦国家統計庁] Итоги Всероссийской переписи населения 2002: Национальный состав населения [2002年ロシア国勢調査結果——住民の民族構成——] http://www.perepis2002.ru/ct/doc/TOM_04_01.xls (2005年8月19日).
- Хан В.С. (отв.ред.) 2001. Десять лет спустя (К 10-й годовщине Ассоциации корейских культурных центров Узбекистана). [10年を経て——ウズベキスタン朝鮮人文化センター協会の10周年によせて

